

松 山 大 学 論 集
第 21 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 1 0 年 3 月 発 行

『モリス』に見られる偽装

岡 山 勇 一

『モリス』に見られる偽装

岡 山 勇 一

E. M. フォースターの『モリス』(*Maurice*)はその執筆動機、登場人物のモデル、さらには出版に至る諸事情などの点で特異な作品だと言える。この作品は1910年に『ハワーズ・エンド』(*Howards End*)が出版されたあと、1914年までに書き終えられていたがその出版は作者の死後の1971年である。この作品の末尾には著者自身が1960年9月に書いた「あとがき」(*Terminal note*)が付けられており、そこで『モリス』に関する着想を得た経緯や登場人物のモデル、あるいはそのテーマに関する著者の考えなどが記されている。読者はもちろんのこと多くの批評家たちもこの「あとがき」に書かれている諸事実の真偽のほどを確かめようとはしていない。定評のあるフォースターの伝記を1977年に出版しているP. N. ファーバンク(P. N. Furbank)も『モリス』が書かれた経緯について、「あとがき」に記述されている諸事実を前提とした説明をしている。しかし、フォースターがこの「あとがき」を付けていること自体極めて不自然である。またその内容についてもそのまま受け止めるには無理があると考えている批評家も最近になって現れている。

本論では『モリス』という作品には同性愛的性向を持つフォースター自身の私的な事情が反映されており、それ故にいくつかの偽装を施す必要があったということ、さらには作者自身の小説家として特性を明らかにするためにはこの作品は格好の材料を提供してくれる作品であることについて検討する。最初に「あとがき」の内容について検討し、次に作品の成立事情に関する代表的な見方を紹介する。これに続いてこの作品の「偽装」に当たるとされる諸点について考察する。その上で『モリス』の内容に関する解説と分析、さらには作品

のテーマと作者の思想などについて検討を加え、『モリス』が特異な作品とならざるを得なかった経緯について論述する。

まず、「あとがき」の内容をざっと見てみよう。「あとがき」の冒頭でフォースターは “In its original form, which it still almost retains, *Maurice* dates from 1913. It was the direct result of a visit to Edward Carpenter at Milthorpe.” (217) と述べ¹⁾、『モリス』の執筆開始は1913年であり、そのきっかけは英国北部の小さな村であるミルソープに住んでいた哲学者、エドワード・カーペンター (Edward Carpenter) を訪ねたことにあったことを告げている。さらにフォースターはミルソープ訪問時に何が起こったのかについて以下のように述べている。

It must have been on my second or third visit to the shrine [at Milthorpe] that the spark was kindled and he and his comrade George Merrill combined to make a profound impression on me and to touch a creative spring. George Merrill also touched my backside --- gently and just above the buttocks. I believe he touched most people's. The sensation was unusual and I still remember it, as I remember the position of a long vanished tooth. I was as much psychological as physical. It seemed to go straight through the small of my back into my ideas, without involving my thoughts. If it really did this, it would have acted in strict accordance with Carpenter's yogified mysticism, and would prove that at that precise moment I had conceived. (217)

フォースターはミルソープのカーペンターを何度か訪ねているが、その2回目か3回目のとき、同性愛者であるカーペンターのパートナー、ジョージ・メリル (George Merrill) がフォースターのお尻の辺りに触ったことがあった。その感触は特別なものであり、今でも思い出すことができるほど独特な感触であり、その感触は彼の魂にまで到達したかに思えたほどの強烈な体験であった。

この体験をした訪問の正確な年月日は明らかにされていないが、この時フォースターは自らの同性愛的性向を喜びを以て追認したようである。

その体験の直後、彼の母親が療養にきていたハロゲイトの宿舎に戻り早速、後に『モリス』となる作品に取り掛かったこと、並びにその構想が次のように述べられている。

I [Forster] then returned to Harrogate, where my mother was taking a cure, and immediately began to write *Maurice*. No other of my books has started off in this way. The general plan, the three characters, the happy ending for two of them, all rushed into my pen. And the whole thing went through without a hitch. It was finished in 1914. The friends, men and women, to whom I showed it liked it. But they were carefully picked. It has not so far had to face the critics or the public, and I have myself been too much involved in it, and for too long, to judge. (217)

ここにはそれ以前にはフォースターは自らの体験をすぐさま作品化するというような書き方をしたことはなかったこと、主要な登場人物は三人であり、そのうちの二人は幸福な結末を迎えるという構想の下、淀みなく執筆をすすめ、1914年には完成させていたことが記されている。何人かの友人にこの草稿を読んでもらったところ、概ね好評であった。その後この作品が批評家や一般の読者の目に触れることはなく、彼自身がこの作品に何度か修正を加えつつ今日に至ったという事実も確認できる。フォースターはこのように述べたあと、“A happy ending was imperative. I shouldn't bothered to write otherwise.”(213) という言葉で、この作品の結末を「ハッピー・エンディング」とすることは必須条件であったと断言している。すなわち、モリス(Maurice)とアレク(Alec)の二人の男性はお互いに愛し合い、その愛は永遠に続くという結末とする必要があったと述べているのである。

さらにフォースターはこの作品の三人の主要登場人物のうち、主人公格のモリス (Maurice) は自分とはまったく似ていない人物としたかったこと、また彼のプラトニックな同性愛の相手となっているクライブ (Clive) はケンブリッジの学風を代表する人物とし、その性格は「ちょっとした知り合いのある学者」(a slight academic acquaintance [218]) をモデルにしており、「ギリシヤ的気質」(Hellenic temperament [218]) の持ち主である。アレクにはモデルがいなし、それ以前のどの文学作品にも見られない人物である。モリスと出会う前にどのような生活をしていたのかも不明である。アレクはミルソープにおける「メリルの手の感触」から生まれた人物であり、『いと長き旅路』(*The Longest Journey*) の登場人物のステイブン・ウォナム (Stephen Wonham) とはちょっとだけにいるところのある人物である。またモリスとクライブのケンブリッジ時代の友人であるリズリー (Risley) のモデルはリットン・ストレイチー (Lytton Strachey) であり、彼は最初にこの作品を読んできた人でもある。以上がフォースターによる登場人物たちについての解説の要点である。

「あとがき」では、この他アレクの登場の仕方とモリスとの愛の永続性をどのように描くのかという点について大いに工夫をする必要があったこと、またこの小説の時代背景は1912年前後(the novel's action-date is about 1912 [221]) としていること、さらに同性愛に関する思想や表現が当時どのような受け止め方をされていたのかということ、これらのことについて簡単なコメントがある。この中でも特に注目される点は、同性愛を扱った作品に対する当時の一般大衆の態度についての言及である。1960年の段階で同性愛に対する一般大衆の態度は、かつての「無知と恐怖」から「熟知と軽蔑」へと変化した。それはカーペンターもフォースターも期待した方向への変化ではなかった。すなわち当時の彼らは二人とも「大衆は同性愛そのものを嫌悪するのではなく、それについて考えることを厭うのである」(We had not realized that what the public really loathes in homosexuality is not the thing itself but having to think it. [221-2]) ということが認識出来ていなかった。そのために、大衆が同性愛も人間の

自然な愛の一つの形であることについての知識を深めれば、それだけ同性愛者への理解も深まると考えていた。しかし、この同性愛については、モリスが自らの同性愛の性向を治療してもらうために診察を求めたホームドクターのバリー医師の「ばかげたことだ」(“Rubbish. Rubbish!” [139])という反応でも分かるように、「そのことについて言及すること」ですら虫唾が走る程の話題であった、つまり同性愛はそれほどに認めがたい感情や性向であったということになる。

しかし、フォースターにとっては『モリス』は彼の他の作品とは違ってことさらに強い愛着のある作品であった。彼がフランシス・キング (F. King) に出した手紙の中で『いと長き旅路』に関して次のように言及している。

In a letter to me [King], he [Forster] said that this [*The Longest Journey*] was the book ‘that comes nearest to saying what I want to say’; and he expressed the same opinion on other occasions, both verbally and in writing. It is also, with the exception of *Maurice*, the book that comes nearest to saying what he wants to say about himself and his own life; but, inevitably, because homosexuality was then a taboo subject, because he did not wish to shock his mother and because he was naturally reticent about himself, it is his own story told largely in metaphor. (King, 44)²⁾

ここでは『いと長き旅路』と『モリス』はフォースターが最も語りたかった彼自身の内面を吐露した作品であること、しかし同性愛に関する場面や心情についてあからさまに語ることは法的に規制されていただけでなく、彼の母親であるリリー (Lily) に衝撃を与えたくないという配慮や彼自身の自己の内面を語ることに臆病であったこと、などの理由により『いと長き旅路』における同性愛のテーマはリッキー (Ricky) の湾曲足 (a club foot) という形に置き換えて語られていることが指摘されている。しかし『モリス』においては同性愛に関

するフォースターの思いが赤裸々に描かれている、という F. キングの指摘に異論はないところである。

F. キングの見るところでは、母親のリリーはフォースターが『ハワーズ・エンド』(1910)を出版した頃には彼の同性愛的傾向に気づいていたとのことである (King, 50)。キングも『モリス』の成立過程について、「あとがき」にあるように、フォースターが1913年にカーペンターを訪ね、G. メリルの手が腰のあたりに置かれた時、何とも言えない快感を得て、自分が同性愛者であることの喜びに目覚めたこと、そしてそれが『モリス』執筆の直接的契機であったことを前提として彼の見解を次のように披露している。

The result of this immaculate conception was the novel *Maurice*, which Forster began to write in 1913, finished in 1914 but continued to tinker with at intervals, up to his death. He saw no prospect of its publication ‘until my death and England’s,’ since unlike Carpenter he was, where his homosexuality was concerned, not one to stand up and be counted but sit down and be counted out. (King, 57)

ここでも指摘されているように、1913年のカーペンター訪問と G. メリルによる「タッチ」が『モリス』執筆の動機であり、作品自体は一年ほどで完成したが、その出版については保留とし、その後何度も手を入れて修正が加えられる形で推移し、彼の死後、1971年になるまで出版されなかったのである。

この作品がフォースターの死後出版となった理由は、この作品が同性愛を扱った作品であることに尽きる。すでに指摘したように、フォースターはこの作品を完成したあと、ごく親しい友人たちにこれを読んでもらって彼らの感想を聞き、必要な修正を加えている。しかし、フォースターはカーペンターのように自らの同性愛を堂々と公表し、同性愛者として生きることはしなかった。彼は同性愛傾向を持つ友人たちの中にあっても、そのことについては黙して

語らず、仲間からは一定の距離を置き、除外される存在に徹していたのである。

またフォースターの信頼される伝記を書いた P. N. ファーバンクはフォースターが最初にミルソープを訪問したのは 1913 年 9 月であると断定している³⁾。フォースターはカーペンターに出会い、彼から強烈なパワーが発せられていることを感じ、その後の「メリルの手の感触」によってフォースターが体内に何かを宿したとことを自覚したのではないかと、ファーバンクは述べている。その後、1914 年 6 月頃までには『モリス』を書き終えていたことも明らかにされている⁴⁾。

これまで述べたような諸事実から判断すると、フォースターは 1913 年 9 月にカーペンターに出会い、G. メリルに尻をさわられ、自らの同性愛者たることを改めて自覚し、同性愛をテーマとする小説を書くことを決意した。彼は集中して執筆に努め、その一年後の 1914 年 7 月に『モリス』というタイトルの自伝的小説を完成させた。しかし、当時、同性愛の行為は法的には犯罪とみなされていた上に、自分が同性愛者であることを知られることを極度に怖れていたため、彼の生前にこれを出版することは認めなかった。大体以上が公認されている『モリス』の出版にまつわる概略である。

ところが、『モリス』成立の事情は上記の内容とはかなり異なっていると考えている批評家がいる。それは、『モーガン：E. M. フォースター伝』(*Morgan : A Biography of E. M. Forster*, 1993)を書いたニコラ・ボーマン(Nicola Beauman)である。彼女の見解によれば、『モリス』執筆の動機も、エドワード・カーペンターや G. メリルをめぐるエピソードなども全てフォースターの作り話や記憶違いであり、この作品成立の事情は多くの批評家が最も信頼できる根拠としている「あとがき」の通りではなかったと主張している⁵⁾。

ボーマンが調べた事実、及び推測は以下の通りである。まず、フォースターは 1909 年 7 月 8 日に大学時代の彼の友人であるマルコム・ダーリング(Malcolm Darling)と彼の友人、アーネスト・メルツ(Ernest Merz)及びもう一人のケンブリッジ大学のキングス・カレッジ出身のジャーミン・ムーサム

(Jermyn Moorsom) と夕食を共にしたことがあった。フォースターはこの中のメルツとは初対面であったが、食事の後で二人だけで散歩に行き、午後9時40分頃に別れる。その翌朝首を吊って自殺しているメルツが発見されたのである。フォースターはメルツが自殺をする前に最後に会話をした相手が自分自身であったことに衝撃を受ける。このメルツの死を悼むためにフォースターにできることは彼を主人公とする小説を書くことであると考えた。つまり、『モリス』は一人の若者の不幸な死から生まれた作品だということのである。

では、一体なぜフォースターは、初対面であった人をモデルとする小説を書いてまで、その死を悼まねばならなかったのであろうか。ポーマンは次のように推測している。まず、メルツという若者（自殺した時、フォースターの4歳下の27歳であった）はどのような人物であったのか。ポーマンによれば、彼は劣等感に悩む、極めて内気な若者であり、その点ではフォースターの性格と良く似ていた。彼はキングス・カレッジの学生の時、フォースターと同じく「使徒会」のメンバーにも選ばれていた。その頃、彼は自らの同性愛的性向を自覚していた。ケンブリッジ卒業後も、彼はロンドンでダーリングやアーサー・コール（Arthur Cole）たちと殊のほか親しくしており、彼らとの至って良好な交際を続けていた。しかし、この二人の友人が1909年夏に次々と結婚する運びとなった。

この年の6月頃には、メルツはケンブリッジ在学中に知り合ったトリニティー・カレッジ出身の友人、マックス・ガーネット（Maxell Garnett）が婚約したとの知らせを受け取っていた。彼はマックスの妹、ヒルダ（Hilda）から一方的に好かれていたこともあり、ガーネット家とも深い付き合いがあった。このように、それまで彼の同性愛の性向を寛大に受け止めてくれていたマルコム・ダーリング、アーサー・コール、マックス・ガーネットなどの婚約や結婚により、彼の愛の衝動はそのはけ口が見当たらない状況に陥っていたということになる。

そのような精神状態にあったとき、メルツはフォースターと会食をし、その

後二人だけで過ごす機会を得たことになる。二人きりになった時、メルツがフォースターにどのような話をし、またはどのような要求をしたのかという点について、ポーマンは次のように述べている。

On the evening of 8 July Merz, I (Beauman) believe, appealed to Morgan. He would not have appealed directly, but his state of mind must by then have been so morose, and yet so clear-eyed in its lack of self-worth, that in some form or another he asked for help. It is even possible that, impetuously and out of desperation, he asked Morgan to be his special friend and that Morgan, almost impatiently as was sometimes his way, rejected him. The other possibility is that Morgan recognised a fellow invert straight away ; and that when the two of them strolled along Piccadilly together (Merz had said that he was going to his club, the Devonshire in St. James's) Morgan had made a remark or an allusion that made Merz realise his true inclinations were now unconcealable. If this was the case, it may have been Morgan's intuition that toppled Merz over into suicide. The third possibility is that in Piccadilly, before going to the Devonshire or to his rooms in Albany, he was accosted by a male prostitute and succumbed ; the fourth possibility is that he was blackmailed (the Darling's explanation). (Beauman, 229-230)

ここではメルツとフォースターとの間で何があったのか、その可能性についてのポーマンの推測が述べられている。第一の可能性として、失意の渦中にあったメルツは勇気を出してフォースターに「特別な友達」になってほしいと訴えたが、たちどころに拒絶されるという出来事があったのではないか。また、第二の可能性としては、フォースターは直感的にメルツが自分と同じような同性愛者であることを見抜いたこと、そしてメルツはもはや自らの同性愛の性向を隠しおおせることは出来ないことを悟った—そのことも彼を自殺へと駆り立て

る動機となったのではないか、というのが第2の推測である。第三の可能性としては、メルツがロンドンのピカデリー界限を歩いているときに男娼から声をかけられ、その誘惑に負けてしまったこと、さらには第4の可能性として、同性愛に関わることで誰かに脅迫されていたことが考えられる、というのである。

これらの推測に共通してみられることは、メルツが同性愛者であり、そのことが他の人に知られることを極度に恐れていたということである。そのことを親友のダーリングですら明確には認識していなかったようだが、少なくともフォースターは同じ性向を持つ者同士の直感によりメルツの同性愛の性向を見抜いていたのである。ほとんどの人がメルツのこのような性癖に気づかなかったなかで、フォースターだけはその秘密を見抜いたこと、しかも彼はメルツが生前に会った最後の人間であったこと、この二つのことによりフォースター自身が動揺し、罪の意識に駆られる。この衝撃とメルツの自殺への引き金を引いたのではないかという良心の呵責に対する最適の贖いはメルツを主人公とする小説を書くこと、しかも結末では主人公に幸福をもたらすことによって彼の魂を救うことであった。このような経緯があった後『モリス』は生まれたのではないかというのが『モリス』成立に関するボーマンの推測である。

さらにボーマンは、『モリス』の主人公の名前について、次のような推測を行っている。すなわち、ドイツ系の人名であるメルツ (Merz) がモーリッツ (Moritz) を経てモリス (Maurice) となったというのである (Beauman, 235)。また、メルツの死後、彼の手紙が家族の手により私家版として公開されていた。この私家版の「手紙集」をフォースターは『モリス』を執筆しているとき、常に傍らに置いていたとのことである。完成した『モリス』はモリスの同性愛者としての生活が描かれているが、主人公モリスの人物像および彼の生活実態は、少なくともバリー医師への相談の後、あるいはジョーンズ氏による催眠療法が無効であると分かった後のモリスの心境は、「手紙集」で明らかになったメルツの生活や精神状態に類似している、とボーマンは述べている。つまり、

『モリス』の主人公のモデルはフォースター自身であると考えられているが、実際のモデルはフォースターときわめてよく似た性格を持っていたメルツであるということになる。

その他のモデルについてもポーマンは興味ある調査結果を示している。ポーマンがメルツの手紙を読んでいたとき、彼女はヒルダ・ガーネットという女性の名前が出てくことに気づく。彼女は、作品中のモリスの実家である「ホール家」とクライブの実家、「ダラム家」と実在の「ガーネット家」との奇妙な符合にも注目している。すなわち、「ガーネット家」にはマックス (Maxell) と二人の姉妹、ヒルダ (Hilda) とドリー (Dolly) がいる。フォースターはこのマックスをモデルとしてクライブを創造し、ヒルダとドリーの姉妹はモリスの二人の妹、エイダとキティへと造形した。マックスはメルツがケンブリッジ大学へ入学した 1899 年の 1 年前に入学している。『モリス』の中では、クライブがモリスの一年先輩である。マックスが結婚したのは 1910 年の 6 月 1 日であるが、作品の中でクライブはやはり 6 月 1 日に結婚している。マックスとクライブの誕生日が共に 10 月であることなど、マックスとクライブとの類似点は多数見いだせるのである。ポーマンが、“During these Edwardian years, the lives of the four men, two real and two fictional, overlapped in too many respects for it to be mere coincidence: Morgan did it deliberately.” (Beauman, 236) と述べているように、実在しているマックスとメルツ、および虚構の人物であるクライブとモリスはたまたま類似点が見いだせるというのではなく、彼らは実在のモデルを下敷きにして作者であるフォースターが巧妙に造形した人物であると判断出来るのである。

『モリス』は想像力の産物であるが、ポーマンが “*Maurice* was more than a work of the imagination: it provides almost documentary detail of the life of one particular segment of Edwardian society.” (Beauman, 235) と述べているように、エドワード王朝の社会道徳がある家族に及ぼした影響に関するドキュメントとして読むことすら可能である。その上でポーマンは、“To read *Maurice* is to be

allowed imaginative empathy with the misery of being a homosexual at the time it was written.”(Beauman, 235)と述べ、読者は当時の社会において悲惨な運命の下に置かれていた同性愛者に対して深い同情の念を抱いてこの作品を読むことになることも主張している。こうした見方が成立するのは、『モリス』が作者の自伝的要素を持った作品であること、あるいは実在のモデルを持った作品であるからだと言うことができる。つまり、通常のTVドキュメント番組や社会的ドキュメントとして分類される書物のように、明確な意図や主張を持った「作品」の場合と同じ捉え方が可能となるのである。(この点については『モリス』出版直後のいくつかの書評においても指摘されているので、後述することとしたい。)

ところが、フォースターはこの作品は社会的ドキュメント等ではなく、あくまでも虚構の作品であり、言いたいことを最も明瞭に盛り込んだ作品であると考えていたようである。この作品の創作意図についてはすでに本論において言及したように、彼自身が書いた「あとがき」において、1913年にミルソープのカーペンターを訪問した時G.メリルによって自らの同性愛者たることを改めて覚醒させられたことにあるとされている。この「あとがき」において、フォースターは『モリス』の物語の時代背景が1912年前後であること、モリスは彼自身とは全く違う人物として造形したこと、クライブの性格には知り合いのある学者の特性のいくつかを借用したこと、なによりも重大なことはモリスとアレックが幸福な結末を迎えることであり、これでなければ『モリス』を書き上げる意味はない、と述べている。なぜフォースターはわざわざこのような「あとがき」を書き足しているのだろうか。しかも、ここには「メルツ」の名前は一切書かれていない。おそらくフォースターはこの小説が同性愛を主題としている故に、実在の人物や事件を匂わせることは避ける必要があると考えたと思われる。というのも、彼は友人たちの間では臆病で、小心者であるという定評があっただけでなく、カーペンターとメリルの同棲生活に見られるように、堂々と同性愛者として生きる勇気も自信も持てなかったと思われる。またボ

ーマンも指摘しているように、フォースターはしばしば周囲の人々の気をそらすことを試みているが、この作品においても「首にロープを巻いて木にぶら下がっているメルツ」という痛ましい自殺の様子から読者の眼をそらすための最大の注意を払ったものと判断できる。

さて、『モリス』の成立にまつわる経緯についてかなりの紙数を使って検討してきたが、ここでこの作品の物語の展開とそれに関連するいくつかの要点について整理しておく必要がある。すでにこの小説のあらすじについて大雑把に述べておいたが、プロット自体はきわめて単純である。フォースターはこの小説において二人の同性愛者の「恋人」が犯罪者とならぬように、あるいはどこかで悲惨な結末を迎えることがないことを想定して話を進めている。主人公のモリスはロンドン郊外の中流家庭の出身であり、父親は亡くなっているが、母親と二人の妹と共に何不自由のない生活を送っている。パブリック・スクールからケンブリッジ大学へと進学し、彼が在籍していた学寮において自らが同性愛的性向を持っていることを自覚させられる。特にクライブ・ダラムはモリスの同性愛的性向を見抜き、二人はプラトニックな愛と友情の絆を結ぶ。

クライブとモリスが知り合いになったあと、モリスはクライブに勧められてプラトンの『饗宴』を読む。そのあと彼はクライブから「愛している」という言葉を囁かれ (56)、反発を覚える。しかしその後モリスはクライブの行動の意味を反芻しているうちに、それまで女を愛するふりをしてきたが、それは偽りであり、彼が心底愛することができるのは男性だけであると自覚する。

He [Maurice] would not --- and this was the test --- pretend to care about women when the only sex that attracted him was his own. He loved men and always had loved them. He longed to embrace them and mingle his being with theirs. Now that the man who returned his love had been lost, he admitted this. (59)

モリスが同性愛者であることを自覚したのはクライブの働きかけがあったからであるが、その瞬間には彼は嫌悪感を抱いてクライブを拒絶している。その拒絶が大きな契機となってモリスは自らの性向に目覚めたと書かれている。しかし、このような認識が可能となるメカニズムについては十分に記述されている訳ではないし、仮に丁寧に説明されたとしても一般の読者には分かり兼ねるところであろう。このあと在学2年目には、モリスはリズリーやその仲間にも同性愛的性向の持ち主がいることを知るが、そのような認識がどのようにして得られたのかについては説明されていない。

やがてクライブはモリス家を訪問していたとき病気で寝込んでしまい、看護婦に世話される体験を持つ。もともと彼の同性愛的性向は極めて観念的であり、モリスとの肉体的接触も表面的なものに過ぎなかったのであるが、モリスの妹たちに親切にされたり、看護婦の世話を受けたりしたことも一つのきっかけとなり彼は自らの同性愛の性向を否定するようになる。しかし、モリスとの友情については将来的にも持続したいという希望を持っていた。そこで、二人の友情を継続し、愛情の面ではこれ以上深みに入ることのない形での解決をみるため一つの方法を採用する。すなわち、クライブは一人でギリシャ旅行に出かけ、旅先から “Against my will I have become normal. I cannot help it.” (104) とだけ書き込んだ短い手紙を出し、モリスに対し「自分は正常」な人間に戻ったことを宣言したのである。クライブは性的には「正常」となったことを告げるが、友情は失いたくないと考えている。モリスはクライブのこの「正常化」宣言を信用することが出来ないため、なんとかしてもとの「関係」を修復しようと試みる。その試みは成功することなく、やがてクライブから「婚約した」という知らせが届く。

こうしてクライブとの関係が途絶えた時、モリスは旺盛な性欲のはけ口を求めて悩むようになる。たまたまホール家を訪ねて来た美しい若者の寝姿を見て襲いかかりそうになったり、列車内でむさ苦しい老人の好色な眼差しに応えようしたりするなど、その欲望を押さえ込む限界にきていた。そこでかつてホ

ームドクターであったバリー医師（Barry）の診察を受けることにする。しかしモリスが自分はオスカー・ワイルドと同じ種類の病を持っていると告白したとき、バリー医師はモリスの相談をまじめに受け取ろうとすることなく、そんな馬鹿げた妄想を捨てることだ、と吐き捨てるように言うだけであった。

その後モリスはたまたま再会したりズリーから精神科医のラスカー・ジョーンズ氏の噂を聞く。藁にもすがる思いでモリスは、自らの症状を説明した書面を携えて、この医師の所へ行く。彼はモリスの症状は先天性同性性欲（Congenital homosexuality）であると診断する。しかし、その治療が成功することはなかったのである。

モリスは8月に一週間の休暇をとり、6月の結婚後まだ新婚早々のクライブとアンに住む田舎の村、ペンジを訪問する。このペンジで出会ったのがダラム家の猟場番人をしているアレク・スカダー（Alec Scudder）である。モリスがペンジのクライブの屋敷に到着したときに初めてアレクの姿を見かける。次に二人が会うのはその夜、雨漏りのする部屋のピアノを移動するためにアレクが呼び入れられた時である。さらにその2日後の夕方にアレクに出会った時、直感的に彼に対する親近感を抱く。その夜、モリスは自分の症状や将来のことを考えて寝付かれない状態でベッドに横たわっていた。ちょうどその時、彼の寝室である二階の部屋に立てかけてありそのまま片づけられずに残されていた梯子を使って何者かが部屋に侵入する音を聞く。モリスはそれがアレクであることを直感的に知る。その夜、生まれて初めてモリスは若い男性と肉体関係を持つことになったのである。

モリスの生涯で一大転機となったこの事件が起きるのは『モリス』の第Ⅲ部37章である。38章以降は第Ⅳ部となり、物語は急速な展開を見せる。モリスはアレクとの間で肉の喜びを求めあう愛の関係に入っていく。42章冒頭に2回目の催眠療法を受けた後、ラスカー・ジョーンズ氏の診察室を出たときのモリスの心境を描写した次のような文章がある。

By pleasuring the body Maurice had confirmed --- that very word was used in the final verdict --- he had confirmed his spirit in its perversion, and cut himself off from the congregation of normal man. In his irritation he stammered ; ‘What I want to know is --- what I can’t tell you nor you me --- how did a country lad like that know so much about me ? Why did he thunder up that special night when I was weakest ? I’d never let him touch me with my friend in the house, because, damn it all, I’m more or less a gentleman --- public school, varsity and so on --- I can’t even now believe that it was with him. (187)

ここに示されているようにモリスはラスカー・ジョーンズ医師のもとを訪れる前日の夜にアレクと肉体的に結ばれている。それは彼自身も意図せぬ形で結ばれた関係であったが、もともと彼の性本能が求めていた同性との関係であった。それ故に、先の引用文には、モリスが肉の喜びを知ったこと、さらに彼が「性的倒錯」の方向へと歩み始め、もはや後戻りが出来ない状況に陥っていることが明らかにされている。しかし、モリスは内心では、紳士の身分でありながら、その愛を分かち合う相手がクライブのような紳士ではなく、身分の低い猟場番人であることに言い様のない苛立ちを抱いている。しかもその関係が始まったのはモリスが隙だらけの状態、肉欲の誘いに無防備であったそのタイミングでアレクが姿を現したことで、これも偶然の一致と言うにはあまりにも出来すぎているとモリスは考えているようである。

この後、ロンドンに戻ったモリスの家にアレクから、ペンジのボート小屋でモリスが来るのを待っているという誘いの手紙が届く。しかし、モリスはこの誘いには応じない。アレクはまもなく兄の一家とともにアルゼンチンへ移住する予定になっていた。彼は英国を出立する前にもう一度モリスと一夜を共にしたいと望んでいた。この手紙にはアレクがモリスとクライブとの関係についても知っており、もしモリスがこの求めに応じない場合には困った事態になるか

もしれないという脅しの文句まで記載されていたこともあり、アレクの真意を測りかねていたのである。モリスはアレクの真意、すなわち純粋な気持ちで同性愛の関係を求めているのか、それとも脅迫なのか、を確かめるためにロンドンのどこかで会う計画を立てるしかなかった。

モリスは電報を打って、大英博物館での再会を求める。実際に会ってしまうと、モリスはアレクに対する欲望を押さえ込むことが出来なくなっていることに気付く。彼はいくつかの展示室を回りながら、アレクに対する彼の気持ちが真摯なものであり、階級が上の者が下の者をからかったり卑しめたりしようとする行為ではないということを説明する。その間に二人は抑えようのない欲望に囚われ、アレクはその夜を一緒に過ごしてくれるようモリスに懇願する事態になる。その夜をホテルの一室で過ごした二人は肉体的にも精神的にも固く結ばれることとなる。

二人はその翌朝恋人同士となったことを喜びを以て確認する。モリスはアレクに対してアルゼンチン行きを取りやめることを提案する。しかしこの時にはアレクは今更アルゼンチンへの移住を取りやめることはできないと答え、予定通りに出立することを告げる。モリスはアレクのアルゼンチン行きを見送るためにサウサンプトン港へ行くが、アレクは姿を現さない。モリスはアレクがその時に身を潜めている場所はペンジのボート小屋であると確信して、ペンジへ向かう。彼の予想通りアレクはボート小屋でモリスの来るのを待っていた。

その後、モリスはクライブに会い、彼とアレクが肉体的にも結ばれた恋人同士となったことを告げる。その場面は以下のように描写されている。

“I have shared with Alec,” he [Maurice] said after deep thought.

“Shared what?”

“All I have. Which includes my body.”

Clive sprang up with a whimper of disgust. He wanted to smite the monster, and flee, but he was civilized, and wanted it feebly. After all they

were Cambridge men... pillars of society both ; he must not show violence. And he did not ; he remained quiet and helpful to the very end. But his thin sour disapproval, his dogmatism, the stupidity of his heart, revolted Maurice, who could only have respected hatred. (213)

ここではモリスが性的にもアレクと結ばれたことを信じることの出来ないクライブの困惑と二人の行動に対する嫌悪の気持ちが表れている。クライブはこの対話のあとで、“the sole excuse for any relationship between men is that it remain purely platonic.”(213) と叫び、男同士の愛はプラトニックなものであり、肉体関係は含まないはずだと自らのドグマを披露している。彼のドグマには階級意識が含まれているので、モリスが階級の劣ったアレクを同性愛の相手に選んだことは全く考えられないことであるとも述べている。

しかし、ことがこの段階に至ってはクライブのそのような説得が功を奏するはずはなかった。モリスは初めてアレクと肉体的に結ばれた後、世間では「性的倒錯者」と呼ばれる身になったことについて以下のような分析をしている。

He [Maurice] had abused his host's confidence and defiled his house In his absence, he had insulted Mrs Durham and Anne. And when he reached home there came a worse blow ; he had also sinned against hi family. Hitherto they had never counted. Fools to be kind to. They were fools still, but he dare not approach them. Between those commonplace women and himself stretched a gulf that hallowed them. Their chatter, their squabble about precedence, their complaints of the chauffeur, seemed word of a greater wrong. (180-1)

ここでは長年の親友であったクライブの屋敷内で同性と肉体関係を結び、彼の信頼を裏切り、その屋敷の神聖を汚し、クライブの妻のアンと母親とを侮辱し

た。それまで平凡きわまる愚劣な家族だと見なしていたモリスの母親や妹たちにも顔向け出来ない犯罪を犯した。性的倒錯者に対する世間の反応はかくの如く厳しいものであり、もはや世間の人々との対話すら成り立たない状況に陥ったことを認識しなければならない。この時のモリスの内面を解説すればこのようになるであろう。

ここでフォースターが『モリス』の「あとがき」で同性愛についてどのような見解を述べているのかについて改めて確認をしておきたい。「あとがき」では、

Since *Maurice* was written there has been a change in the public attitude here: the change from ignorance and terror to familiarity and contempt. It is not the change towards which Edward Carpenter had worked. He had hoped for the generous recognition of an emotion and for the reintegration of something primitive into the common stock. And I, though less optimistic, had supposed that knowledge would bring understanding. We had not realized that what *the public really loathes in homosexuality is not the thing itself but having to think about it.* (Italics mine. 221-2)

のような文章があり、ここでフォースターが訴えていることは、1960年代に入り、同性愛に対する一般大衆の知識は深まり、以前のように恐怖の対象とはならなくなったが、同性愛は依然として軽蔑の対象であり続けている。カーペンは同性愛に対する世間の人々の見方がこのような方向に変わることを願ったのではなく、同性愛という人間の自然な感情を世間が受け入れることを願っていた。しかし、世間の大多数の者は同性愛が嫌いかどうかということよりも、同性愛について考えること自体を嫌悪している。これが同性愛に対する世間の見方についてフォースターの持っていた認識なのである。

この「あとがき」は1960年に書かれており、まだウルフェンデン勧告は法として制定に至っていないため、フォースターは悲観的考えをもっていたこと

が明らかである。1967年にウルフェンデン法が制定され、21歳以上の同性愛の行為は合法化されたが、そのような状況になってもフォースターは『モリス』出版を認めなかった。おそらくフォースターは、ウルフェンデン法の制定により、同性愛の行為が罰せられたり、その表現が違法とされたりすることはなくなったが、世間がこの行為を「性的倒錯」ではなく、人間の自然な愛の一つの形態として公認することはないと確信していたと思われるのである。

『モリス』の物語はフォースターが意図したように、モリスとアレクが世間の非難や弾劾の届かない場所で幸せな生活を築くことを示唆した形で終わっている。モリスのモデルはボーマンが指摘しているように、「性的倒錯者」として生きること耐えられなくなって自殺したメルツであるとすれば、このような結末を用意することはフォースターにとっては必至のことであった。まして、「あとがき」でも言及されているように、モリスにフォースター自身の姿が投影されているとなれば、なおさら悲惨な結末を用意することはありえない。

『モリス』が書かれた時、それが1912年であれ、1913年であれ、モリスとアレクは同性愛の行為に身を委ねた犯罪者である。その犯罪者がひっそりと生活できるような田舎が英国に残っているはずだ、というのはフォースターの切実な願望であったと思われる。

『モリス』が出版されたのは1971年である。その直後の書評での受け止め方はどのようなであったかにも注目してみたい。最も早い時期に書かれた書評の代表的なものとして、C. P. スノー (C. P. Snow) の『ファイナンシャル・タイムズ』(1971年10月7日)紙上の書評を見てみたい。スノーは、フォースターが書いた同性愛をテーマとする小説の原稿がこれまで文壇の一部で回覧されているという噂があったが、その噂の作品がP. N. ファーバンクの序文付で出版されたことを紹介したあと、この作品のあらすじについて簡単に言及して次のように述べている。

It [*Maurice*] is a novel with a purpose, and the purpose is to proclaim that homosexual love, in its fullest sense, can be happy and enduring. Hence the ecstatic ending.....

In literary terms, though, the purpose --- as with most explicit purposes in art --- cripples the novel. It brings out, exaggerates, all Forster's lack of feeling for people different from those he mixed with.⁶⁾

スノーは『モリス』の創作意図があきらかに同性愛の擁護にあったため、文学的には一部の人々の共感しか得られない作品になっていると述べてあまりよい評価を与えていない。

また、『タイムズ』の教育版新聞 (*The Times Educational Supplement*) の1971年10月8日号にはパディ・キチェン氏 (Paddy Kitchen) が『モリス』の道德的側面について次のような書評を載せている。

In comparison with the other works *Maurice* is schematic, but this is not surprising when one considers that it was written to delineate a specific moral theme. This theme is expressed, in P. N. Furbank's introduction, as the affirmation 'without possibility of retreat, that love of this kind [ie between two men] could be an ennobling and not a degrading thing and that if there were any "perversion" in the matter it was the perversity of a society which insanely denied an essential part of the human inheritance.'⁷⁾

キチェン氏はこの作品は初めから一つの道德的テーマ、すなわち男性の同性愛を擁護する意図を持って描かれた作品であると述べている。しかも、もし、男性の同性愛が性的倒錯であり墮落したものであると見られるのであれば、その場合には人間の本性の最も基本的な愛情を否定しようとする社会の方こそが歪んでいることを認識させる小説である。キチェン氏はモリスとアレクの関係は理

想主義的に描かれていて、いささかりアリティに欠けるきらいがあるが、フォースターのような道徳的作家の場合にはやむをえない結果ではないかということを示唆している⁸⁾

当時バーミンガム大学の上級講師の職にあったデイビッド・ロッジ (David Lodge) も『タブレット』誌に書評を寄せている。彼は『モリス』に対して興味深い評価を残している。

Maurice is not a very good novel, but even if it were a very bad novel (which it is not) its publication would still be a major literary event. Most judges, after all, would rank E. M. Forster second or third among native English novelists of this century --- below Lawrence, though not necessarily below Virginia Woolf --- but this reputation has rested on only five published novels. The last and greatest of these, *A Passage to India*, was published as long ago as 1924, while Forster lived on until 1970. In his later years it was an increasingly open secret that there was another novel, about homosexuality, which was to be published posthumously, and *Maurice* (written in 1913-14, and revised from time to time up until 1960) is that novel. It will not enhance Forster's reputation, but it should not be allowed to damage it either.⁹⁾

ロッジはこの文章で、『モリス』は出来の良い小説ではないが、この出版は文学的出来事である。20世紀の小説家の中でフォースターの評判はD. H. ロレンスには劣るが、V. ウルフの下に来るとは言いがたい。しかもその評価は一大傑作である『インドへの道』を含む5つの長編小説の作家としての評価である。では彼の死後出版された『モリス』を含めて評価するとどうなるのか。この出版によって彼の評価が上がることも、また下がることもないだろう、というのがその答えである。

さらにロッジは同じ書評の後半で、『モリス』の主題について次のような見

解を示している。

Maurice deals with the kind of love that (we now know) Forster himself knew inwardly --- indeed it was written as a direct response his full acceptance of this aspect of his selfhood; yet it is significantly less powerful than the novels where Forster, because of the taboos of his time, was forced to express himself deviously or indirectly through heterosexual themes. The reason, I believe, is that because he knew that he could not publish *Maurice* for an indefinite period of time¹⁰⁾

『モリス』にはフォースター自身の同性愛者として生きることを決意した自己の姿が表明されているが、他の作品と比べると見劣りがする。というのも同性愛のテーマは当時はタブーであったため、他の作品では異性愛の関係を描きながらもそこに同性愛のテーマを忍び込ませるしかなかった。しかし、『モリス』では直接的にそのテーマと取り組むことが出来たため、かえって他の作品よりも想像力において不満が残る作品となったのではないか。ロッジのこのような指摘は概ね妥当であり、『モリス』における最も高く評価すべき点は「自己の本性」を忠実に描こうとしたその姿勢にある。

ところで日本における E. M. フォースター作品の翻訳者であり、フォースター研究の第一人者であると思われるのは小野寺 健氏である。その彼が 2001 年に出版した研究書はそのタイトルが『E. M. フォースターの姿勢』となっている。その第 8 章で、小野寺氏は『モリス』はフォースターが自らの同性愛に関するストレス解消のために書いた作品であり、その文体や構造の上からも、「芸術作品としては二流品としか思えない」¹¹⁾と述べている。さらに小野寺氏は、

(『モリス』は) 多くの人が指摘するとおり、率直に言って対象との距離の

とりかたの不足、つまり主題のあつかいの甘さ、そこから生じる行文の緊張感の欠如、構成の安易さといった欠点はあきらかで、むしろこれを原作とするジェイムズ・アイヴォリー監督の手になる映画のほうが、風俗の描写に徹していて視覚芸術としてそれなりの魅力があるだけに、かえって優れているとさえ思える。『モリス』は、同性愛小説だからというより、芸術作品としての二流性のゆえに、とりあげる意欲を削ぐのだ。要するにたあいなさすぎ、つまらないのである¹²⁾。

と述べ、この作品が批評意欲をかき立てる作品ではないと酷評している。また小野寺氏は、同性愛であれ、異性愛であれ、「愛」の本質に関する洞察が浅いこともこの作品の欠点であるが、この作品は、フォースターが生涯にわたって「苦しんだ切実な情熱」である同性愛を扱った作品なので、一応の考察はしておくべきであろう、といった歯切れの悪い言い方で批評している。

以上のいくつかの書評などで何うことのできる『モリス』評価は芳しいものではない。この作品について好意的意見を述べているは、当然のことながらエドワード・カーペンターである。フォースターがこの作品を1914年6月に書き上げ、それをカーペンターに送り、意見を求めたところ、彼は1914年6月23日(?)付けのフォースター宛の手紙の中で好意的返事を出している。カーペンターは、『モリス』には評価すべき点が多々あり、人物も出来事もしっかりと読者の興味を引くように描かれている、何よりもアレクに悲惨な結末を与えていないことでこの物語は救われている、もう一度ゆっくりと読み直したい作品である、と述べている。

すでに述べておいたように、『モリス』の原稿を最初に読んだ友人はリットン・ストレイチーである。彼は1915年3月12日付けのフォースターへの手紙のなかで彼自身の意見を述べている。まずストレイチーは『モリス』を十分楽しんで読み終えたこと、特にモリスとクライブの関係を描いた前半部分は良く

できている。しかし、アレクとモリスの同性愛の関係については成功しているとはいえない。その理由は所属階級の異なる二人が惹かれあい、肉体関係を結ぶに至るプロセスは納得のゆく描写になっていない、また二人がシャーウッドの森で幸せに過ごすという結末は神話じみた話であり感心できない。ストレイチーはこのように述べて、この作品への率直な批判を書き送っている¹³⁾。

ストレイチーが『モリス』の内容で最も理解に苦しむと述べている点はモリスとアレクの肉体関係を明確に描いていることである。彼は、“I don't understand why the copulation question should be given so much importance.”¹⁴⁾とか、“I really think the whole conception of male copulation in the book rather diseased --- in fact morbid and unnatural.”¹⁵⁾などの言葉で男同士の性交渉の場面がなぜ必要であるのか理解しがたいと批判している。そのような疑問点はあるが、ストレイチーにとって『モリス』は歓迎すべき内容の小説であったと判断している。このストレイチーの批判に応えて、この後フォースターがどこをどのように修正したのかは不明である。

これまで述べたように『モリス』はさまざまな問題点を抱えた「特異な」作品であると言える。まずこの作品の成立年に関する問題点がある。フォースターの伝記を出版し、また『E. M. フォースター書簡集』の編集もしているP. N. ファーバンクをはじめ、F. キングなどのフォースターの親しい友人たちのほとんどがこの作品は1913年9月以降に描き始められ、翌年の7月頃には完成していたことを前提として議論をしている。しかし、フォースター自身が1960年にわざわざ書き足した「あとがき」におけるこのような記述が正しいという前提がもし偽装であったとすれば一体どうなるのか。

もう一人の伝記作家であるポーマンは『モリス』の「あとがき」にも疑いを抱いている者の一人である。多くの研究者が「あとがき」の記述が正しいという前提に立った上での議論を展開しているのに対して、ポーマンは異論を唱えている。すなわち、フォースターが「あとがき」で書いているように、最初にカーペンターを訪ねた年と月に関する記述は彼の勘違いである。それを裏付け

る証拠が3つある。第一はダラム大学図書館の「ブローマー文庫」に残されている「あとがき」の原稿の冒頭に、「この作品の書き始めは1910年である」という記述があること。この記述にある「1910年」のゼロの文字が後から打たれたタイプライター文字であり、第3パラグラフの余白の部分に、この作品を「1912年に書き終えた」という言葉が見られること。第二に、ケンブリッジ大学南アジア研究所にある「ダーリング文庫」には“*“Maurice” --- Begun 1910, finished 1912*”と描かれた紙が残っていること。第3にフォースターの友人であったフロレンス・バージャー (Florence Barger) の息子が自分の記憶に基づいて『モリス』に関して記録したものに、*‘he [Forster] did write such a novel, called “Maurice”, but way back in 1911’*という記述が見られること。以上3つの点を根拠にして考えると、この作品の成立年は「あとがき」に示されている「1913-14年」ではなく、「1910-1912年」であるともいえるのである。¹⁶⁾

もし『モリス』の成立年が「1910-1912年」であるとすれば、ボーマンが指摘しているように、モリスのモデルはメルツである可能性が高くなる。そうなれば、この作品は同性愛者への理解を求めようとする作品であるとともに、メルツの鎮魂のための小説でもあると解釈することが可能なのである。フォースターがこの作品の「あとがき」で成立年を「1913-14年」とし、その執筆動機を「メリルの手の感触」としていることは、作品の内容とメルツの事件との関わりを隠そうとする一つの偽装であったことになる。そして、『モリス』という特異な作品について検討することによって、フォースターは自己の本性に忠実に生きようとしながらも、同性愛者としての自己のアイデンティティを押し隠すような生き方しかできなかった小心者で臆病な性格を持った作家であることが確認できるのである。

注

- 1) E. M. Forster, *Maurice* (Introduction by P. N. Furbank; London: Penguin Books, c1972.), p. 217. 以下同書物からの引用は本文注としてそのページ数のみを括弧にいれて示す。

- 2) Francis King, *E. M. Forster* (London: Thames & Hudson, 1978), p. 44. 以下同書からの引用は本文注として (King, 44) のように表示する。
- 3) P. N. Furbank, *E. M. Forster: A Life* Vol. I (London: Secker & Warburg, 1977), pp. 256. 以下同書からの引用は本文注として (Furbank, 256) のように表示する。
- 4) *Ibid.*, cf. p. 259.
- 5) Nicola Beauman, *Morgan: A Biography of E. M. Forster* (London: Hodder & Stoughton, 1993), pp. 233-4. 以下同書からの引用は本文注として (Beauman, 233-4) のように表示する。
- 6) Philip Gardner (ed.), *E. M. Forster: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1973), p. 435.
- 7) *Ibid.*, p. 445.
- 8) *Ibid.*, p. 445.
- 9) *Ibid.*, p. 473.
- 10) *Ibid.*, p. 474.
- 11) 小野寺 健『E. M. フォースターの姿勢』(みすず書房, 2001), 205 頁。
- 12) 同上書, 205 頁。
- 13) Philip Gardener (ed.), *op. cit.*, pp. 429-30.
- 14) *Ibid.*, 430.
- 15) *Ibid.*, 431.
- 16) Nicola Beauman, *op. cit.*, 234.

引用文献

- Forster, E. M. *Maurice*. (Introduction by P. N. Furbank.) London: Penguin Books, c1972.
- Gardner, Philip. (ed.) *E. M. Forster: The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1973.
- Furbank, P. N. *E. M. Forster: A Life* Vol. I. London: Secker & Warburg, 1977.
- King, Francis. *E. M. Forster*. London: Thames & Hudson, 1978.
- Beauman, Nicola. *Morgan: A Biography of E. M. Forster*. London: Hodder & Stoughton, 1993.
- 小野寺 健『E. M. フォースターの姿勢』みすず書房, 2001。